札幌大学総合論叢　第 42 号（2016 年 10 月）

〈論文〉

A．C．ホミャコーフと近代技術

大　矢　　温

はじめに

スラヴ派については，従来，農奴解放に向けた議論や地方自治での活動といった「リベラル的」傾向とともに[1]，彼らの保守的な側面として「古いピョートル以前のルーシを理想化するローマン的歴史学」の存在が指摘されてきた[2]。他方でスラヴ派のメンバーは,『モスクワ文集』,『ロシアの談話』, あるいは『世評』といった彼らが主宰する刊行物において, 万国博覧会や鉄道網建設といった近代技術に関する議論を展開し[3]，あるいは実際に西欧の農業機械を自分の領地の農業に導入したりもしている[4]。スラヴ派においては，前近代的なルーシへのまなざしと近代技術とが併存しているのだ。

19 世紀の 30 年代末から 40 年代にかけて，主にモスクワのサロンにおいてロシアの民族性を基礎に論争を展開した古典的スラヴ派については[5]，そのグループのメンバーの一部が 60 年代以降，従来からの民族性の議論をより発展させる形で汎スラヴ主義に議論を展開する一方で[6]，他の一部のメンバーはゼムストヴォをはじめとする地方政治にも活動の舞台を展開したことが知られている。しかしながら，民族性を基礎に据える彼らの思想が地方政治の実践へと発展する際の思想的・理論的一貫性についは従来，主に農奴解放議論の側面から説明されてきたものの，十分な解明がなされたとは言えない状況にあった。本論においては，民族性と地方政治というこの両者を架橋する理論的要素として彼らが持つ近代技術への関心に着目し[7], 古典的スラヴ派の中心的なメンバーであった A. C. ホミャコーフにおける近代技術論を素材に民族性の議論と技術論との両者の関係を分析し，そこに後年スラヴ派の活動が，地方政治の実践へと展開する思想的契機を見ることができることを明らかにしてみたい。

Ⅰ　ホミャコーフと技術論

ホミャコーフは古典的スラヴ派のグループの代表的な思想家と目されている。1830 年代末のモスクワのサロンにおいて，ドイツのローマン主義哲学や当時ヨーロッパで高揚し

ていたナショナリズムの影響を受けた若者を中心に「スラヴ的傾向」をもったグループが形成された際に，彼らの「スラヴ的傾向」を具体化し，「他の世界とは違うルーシの地」の特徴を，人民と権力の一体性，および正教会の純粋性の2点として定式したのはホミャコーフだった[8]。まさにこのホミャコーフを中心にして，当時ロシアのナショナル・アイデンティティーに目覚めたキレーエフスキー兄弟，アクサーコフ兄弟，コシェリョーフ，サマーリンらが加わって，古典的スラヴ派と呼ばれるグループを形成し，西欧の歴史発展に人類史の普遍性を認める「西欧派」と呼ばれる別のグループと対立したのだった。就中，グループ内でも特にホミャコーフは，「スラヴ的傾向」の原則的立場を貫いたと伝えられている。この点，グループの一員であったコシェリョーフは後年，当時のホミャコーフが「極度に教会的な」点，および「ヨーロッパ文明を十分評価しない」点でグループ内でも際立っていたことを回想している[9]。とはいえホミャコーフは，1822年にモスクワ大学の物理数学科を卒業しており，また，少年時代からの家庭教育によってフランス語，ドイツ語，英語，そしてラテン語に堪能であったし，大学卒業後は画家を志して一時，パリに滞在していたこともある。したがってこのコシェリョーフのホミャコーフ評は多少割り引いて受け取らなければならないかもしれない[10]。また彼は，大学在学中と卒業後の2回，トルコとの戦争に従軍もしている。

さて，このようにスラヴ派グループの本流ともいえるホミャコーフではあるが，彼の死後，1900年にモスクワの印刷所から発行された彼の著作全集の巻末には彼が発明した「ロータリー蒸気機関」なるものの設計図が収められている。彼が1851年にイギリスで特許を取ろうとした際に機械の説明文とともに小冊子として出版されたものだ[11]。従来のピストン式のレシプロ蒸気機関とはちがい，「導入コスト」と「運用コスト」に配慮されて開発されたこのエンジンは，蒸気の力でローターを回すためにエネルギー効率がよく，安定した出力を得られる，とのことだが，保守的な側面からスラヴ派を理解しようとすると，この発明はいかにも場違いな印象を与える。経済効率といい，新開発の技術といい，およそ「極度に宗教的な」思想家とは結びつきがたい違和感を受ける。

とはいえ，ホミャコーフの近代技術に対する興味は，このロータリー・エンジンに留まるものではない。たとえばこのロータリー・エンジンに先立つ1845年には「戻る力 **forces de retour**」という「新たに発見された力」が拓く技術的可能性について雑誌『モスクワっ子』で論じている[12]。この「戻る力」というのは，物質に「直接的な力」を与えた時に，物質が元に戻ろうとする力のことで，ホミャコーフは，弾丸が火薬の「直接的な力」で発射されるのに対して矢は弓の「戻る力」によって射られる，と説明している。圧縮空気も「戻る力」の応用で動力源となるという。技術の新地平を拓いたかのような書き

ぶりである。しかしながら，この圧縮空気機関は彼の独創ではない。彼が圧縮空気に着目したのは，おそらく圧縮空気を使った動力機関を発明したフランス人のアントワーヌ・アンドロの影響であろうと推定される。アンドロの名を挙げながら，さらにホミャコーフは圧縮空気を動力源とした機関車の可能性にすら言及しているからである。ここでホミャコーフは，圧縮空気機関車はボイラーや石炭を搭載する必要がないのでより効率的だと力説するのだった。さらにまたアンドロ自身が著した，圧縮空気が拓く未来の社会を描いた小説に触発されたのか，都市部において圧縮空気を供給するパイプ網を整備してそれをエネルギー源として利用する案さえ彼は論じている[13]。この圧縮空気のエネルギー源としての利用については，現在の技術的観点からの評価は措くとして，少なくとも彼が新しい技術に強い関心を持っていたことは明らかである。同じ論文の中で彼は，この圧縮空気の応用技術のほかにも，深海の潮流を利用した船舶，および現在の内燃機関のようなものであろう，ガスや爆発性の物質を使ったエンジンを紹介している[14]。このとこからも，彼が「戻る力」のみならず新しい技術全般にかなり強い関心を抱いていたことは明らかである。

このロータリー蒸気機関の発明より少し前，1843年に全ロシア産業博覧会がモスクワで開催された際も，彼はこの博覧会に大きな興味を示している。彼は「ほとんど毎日，博覧会に通い」[15]，新しい製品に見とれたり，売り手と話し込んだりし，そこで得た情報を見聞録「博覧会についてのペテルブルクへの手紙」にまとめ，雑誌『モスクワっ子』に発表している。この全ロシア産業博覧会というのは，1829年にペテルブルクで開催されたのを皮切りに，ほぼ２年おきにロシア帝国内の各地で開催された国産品の見本市である[16]。この見聞録で彼は，博覧会で見た布製品，ガラス製品，銅製品について詳細な記録を残している[17]。また，そこに出品された工芸品の分野では，ドイツで評判になったアマゾネスの像の複製品にかなりの紙幅を割いて論評しているのだが[18]，これについては後述したい。

さて，この全ロシア産業博覧会に見られるような一国内の見本市は18世紀末からヨーロッパ各地で催されてきたものだが，産業革命の進展と経済の国際化を背景として，国際的な見本市，つまり万国博覧会が企画されるようになる。嚆矢となったのは，当時ビクトリア朝の平和と繁栄を誇っていたイギリスであった。イギリスは「産業革命の勝利の宣言であり大英帝国の存在感の誇示」でもあるこの大事業を[19]，世界に先駆けて1851年にロンドンで開催したのだった。この万国博覧会はスラヴ派のグループ内でも評判となり，中にはコシェリョーフのように実際にロンドンの万国博覧会会場を見学するのみならず，そこで農業機械を購入して自分の領地で実用化する者さえ現れた。ただしホミャコーフはその目でロンドン万国博覧会を見てはいない。彼もまたロンドン万国博覧会を訪れようと願ったが，「その願いはかなえられなかった」[20]のだった。

とはいえ，このことを以て彼の興味が万国博覧会から離れたわけではなかった。特にホミャコーフの関心を呼んだのは万国博覧会会場のメイン会場となった「水晶宮 The Crystal Palace」であった。これはあらかじめ工場で作られた鋳鉄製の骨組みを現地で組み立て，そこに板ガラスをはめるという，当時としては画期的なプレハブ工法で作られた長さ 563m，幅 124m の巨大な温室のような建物であった。実際，この水晶宮を設計した J. パクストンは庭師の出身で，温室からこの建物の着想を得たという[21]。従来の石と煉瓦に代わって，縦 49 インチ，横 10 インチの標準板ガラスで 293,665 枚，総重量 400 トンのガラスを使用して建設されたこの水晶宮は[22]，その規模と設計の斬新さで世間の耳目を集めた。ホミャコーフ自身，「イギリスは万国博覧会と水晶宮という新たな奇跡によってヨーロッパを驚かしたのだ」としてこの水晶宮を高く評価している[23]。

> そう，鉄とクリスタルからできたこの素晴らしい建物を眺め，パイプの柱が軽々と持ち上げられる様子，ガラスのアーチが大胆に湾曲する様子，光線は透過しても中が見えないこの奇妙なクリスタルに光がきらめく様子，を見たいと願ったのだ…何よりもまず，白状するのだが，ハイド・パークの樹齢何百年もの古木を[24]，見たかった。それらはあえて切り倒されず，そのための場所を確保するために新しい建物の高さを数十アルシン（1 アルシンは約 71cm）持ち上げることになったのだ[25]。

もちろん水晶宮のみならずホミャコーフは，万国博覧会自体も「知性の素晴らしき現象」として賛辞を惜しまない[26]。さらにホミャコーフの水晶宮および万国博覧会への礼賛は，それを実現したイギリスへの礼賛へと展開する。ピョートル大帝以来，ロシアにおいては理性という点でフランスが常に道標となってきた。ドイツ派は少数だったし，「イギリスに影響を受けた人はほとんど一人もいなかった」。「実際，近年に至るまでイギリスにはほとんど注目してこなかったが，そこで奇跡が実現したのだ」。1826 年に完成して世間の注目を集めたメナイの吊り橋は素晴らしいが[27]，「万国博覧会の建物ははるかに大きな衝撃をすべての者に与える」と[28]。

しかしここでは，「ロシアの優位」という「スラヴ主義」の中心的概念からは正反対の思想が展開されているようにも見える[29]。むしろここでホミャコーフは「イギリスの優位」を説く「イギリス主義者」になった感すらある。18 世紀に急激な西欧化を強行したとしてスラヴ派から常に非難されてきたピョートル大帝の改革についても，それがフランスに範を求めた点のみが批判されており，むしろドイツやイギリスを手本にした改革であればそれは肯定的に評価できるような書きぶりである。いずれにしろ，「スラヴ主義陣営で

ピョートル改革について最も激しい批判を投げかけた人物」[30]とも評されるホミャコーフの言葉としては違和感が残る。

ピョートル改革に対する評価，および民族的なものと全人類的なものの関係，といった点に注目しつつ，ホミャコーフが著した上述の論文を手掛かりに彼の思想を分析する必要があろう。

Ⅱ　ピョートル改革に対する評価

すでに見てきたようにホミャコーフは，18 世紀初頭にロシアに急速な西欧化をもたらしたピョートル大帝による一連の改革を全面的に否定しているわけではない。では，彼はピョートル改革のどの側面を否定し，どの側面を肯定しているのだろうか。

まず，肯定的側面。ホミャコーフによれば，ピョートル大帝の意義は，かれが「ロシアの知性を目覚めさせようとした」ことに求められる。

> ピョートルは我が国にヨーロッパの学問を導入し，それを通して我が国にヨーロッパの全生活を導入した…彼は数世紀にわたる眠りを揺り動かしたかったのだ，彼は眠れるロシアの知性を，痛みを伴うショックで目覚めさせたかったのだ[31]。

ピョートル大帝とともに西欧文明の導入に貢献したＭ．Ｂ．ロマノーソフについても肯定的な評価をする。ちなみにロマノーソフは 1736 年から 40 年にかけてドイツやオランダに留学し，ロシア人最初のロシア科学アカデミー会員となったこともあり，彼の名は現在でも，モスクワ国立大学が彼の名を冠するなど，ロシアの学問科学のシンボル的存在となっている。ホミャコフにとってもピョートルとロマノーソフはロシアに西欧文明を導入した代表的な人物なのだ。

> （ピョートルとロマノーソフという）二人のロシア人がロシアの発展の限界と，不十分さを感じた時，彼らの一人が自らの手で働き，西洋の偉大さの原動力と原理を智慧で理解しようと異国へと旅立ったとき，別の一人が学び，明晰で神によって与えられた自らの理性を啓蒙しようとそこへ走り去った時，両者にはあらゆる真実への，あらゆる純粋に人間的なものへの，学問芸術一般への高潔な志向があったのだ[32]。

さらに西欧の近代技術の導入についても，我々は「知的あるいは物質的な改良を拒絶する権利を持っていない」とし，「我々は，それによってゼムリャーが強固になり[33]，産業

が拡大し，社会の豊かさが改善するようなものをすべて受け入れなければならない」とまで言い切っている[34]。ペテルブルクとモスクワを結ぶ鉄道建設の計画が持ち上がった際にも，彼は，西欧には「フランスの賭博場」や「古代エジプトの盗人工場」など，「物質的な利益を口実とした道徳的な悪」がある[35]，と多少用心はしながらも，それでもこの計画に賛成するのみならず，ロシア全土を覆う鉄道網が「巨大な利益」をもたらすとして，将来のこの「巨大な企図」さえも積極的に肯定している[36]。むしろ，その際，その開発に労力を費やすことなく，「他人の労働の果実を刈り取ることができる」として，外国技術の導入を歓迎してさえいる[37]。

ホミャコーフにおいて，技術の導入は，一義的には国防や産業発展の見地，つまり「必要」の見地から肯定される。たとえば彼は，ドイツで黒色火薬が採用された際に，周辺諸国も軍事的な対抗上，黒色火薬を採用せざるを得なかった歴史上の例を引きながら，他国が技術の利益を享受するなら「ロシアもまたそれと同じ可能性を享受する必要がある」[38]，と説く。従軍経験のあるホミャコーフにとって，戦場における軍事技術の優劣が死活問題であることは身を以て体験したことであろう，ここでも競争的な国際環境，および国際市場におけるロシアの競争能力という見地から技術導入の「必要」が説かれるのだ。

さて，1843年にモスクワで開催された全ロシア産業博覧会はロシアの国産品の見本市であった。すでに述べたとおり，ホミャコーフはここに足しげく通い，熱心に見学している。その際彼は，世界市場における競争力という観点から彼は展示品を吟味していることを指摘しておく必要があろう。たとえば，博覧会に出品された布製品については，「ラシャや絹織物ははっきりと改善されており，我が国に確実な富の源泉を供給することを約束している。ただ残念なのは，それらの外国製品の例が，その税抜き価格とともに展示されていなかったことだ」と，これを国際競争の観点からみている。同様に指物についても，「値段は法外で，作業はほとんど中国製，趣味はほとんどホッテントット」とコストパフォーマンス，国際競争の観点から厳しい評価を下している[39]。単なる好奇心から物見遊山で見物に行ったのではなかったのだ。世界市場における競争力，という視点からロシアの国産品に評価を下しているのだ。おそらくこのような視点が60年代以降に地域経済の活性化や産業の振興といった方向性を伴ってゼムストヴォ運動へとスラヴ派のメンバーを導くことになるのであろうが，ここでは深入りしない。指摘するにとどめる。

さて，このような記述を前にすると，当然のことながら，スラヴ派が常日頃繰り返す「ロシアの民族性」の観点はどこに吹き飛んでしまったのか，という疑問が起こる。この問を抜きにして，ホミャコーフの技術論を「必要」の観点のみから説明することはできないはずだ[40]。というのも，ホミャコーフは，「必要」の観点からは肯定しながらも，まさにこの「ロ

シアの民族性」の見地からピョートル改革を批判しているからである。「必要」と「民族性」両者の関係に注意しつつ，ホミャコーフによるピョートル改革の評価を分析する必要があろう。

上述のように，ホミャコーフはピョートルがロシアに西欧文明を導入したことを彼の功績と考えている。しかしピョートル改革以来ロシアは，150 年間にわたって「西欧の兄弟」から彼らの啓蒙の成果を借用しているが，何も我が物とせず，何も達成しなかったではないか。ここからホミャコーフは，「ロシアは多くのものを我が物としたか，多くのことをなしたか？」「我々と一体となるようなもの，我々に深い分裂をもたらさなかったもの」は何もないではないか，と厳しくピョートルの近代化を非難する[41]。西欧の啓蒙の成果がロシアに根付かず，かえってロシア国内に分裂をもたらせた，との非難である。この分裂とは，西欧化され精神的にロシアから切り離された一部の上層社会層と，啓蒙から縁遠い伝統的社会に生きる下層社会層との間に生じた亀裂のことであろう。

では，なぜピョートルの近代化は西欧文化の導入に失敗したのだろうか。まず，ホミャコーフによれば，「学問科学 наука はその本質から，どこでも同じである。その法則はあらゆる地であらゆる時代で同一である」と学問科学の普遍性と全人類的意義を論じる。学問科学に普遍性を認める点で，西欧派の主張と異なるところはない。他方，それと同時に彼は，「しかし学問科学に随伴する総合 синтез は，時と場所によって変化する」，とも論じている。ホミャコーフによれば，この学問科学と「総合」との間に常に存在する内的な関連を理解できないものは「ひどい誤り」に陥るのであって，ピョートルの誤りの原因もまさに「総合」を欠いた西欧文化の全面的な導入にあった[42]。ロシアでは「一人の人間によってヨーロッパの全形式，その生活のすべての外面的な姿が導入され」，この誤りが「巨大でほとんど信じがたい規模で達成された」のである[43]。「彼は，最も不合理なものですら，西洋のすべての形式を導入した」[44]。「西欧とは異なり，より高い原理に基づいていた」にもかかわらず「ピョートル以前の風土 стихия」は，ピョートルの「啓蒙の誤った方向性」によって，発展の芽をついばまれてしまったのだ[45]。

このようにホミャコーフは，一方で学問科学の普遍性を論じながら，他方でロシアの社会環境との「総合」を欠いた西欧文化の導入を批判している。この点が，西欧文化に普遍性を見，その全面的な受容を説く西欧派との違いであろう。

Ⅲ　普遍的なものと民族的なもの

すでに述べたように，1843 年の全ロシア産業博覧会の見聞録において，ホミャコーフはかなりの紙幅を割いて「アマゾネス像」を論評している。彼自身，この像に並々ならぬ

興味を覚えたことを告白している。「最もしばしば，最も長い時間，わたしは一般にあまり注目されないこの像の前に佇んだ」[46]。これは豹と戦う騎乗のアマゾネスの像で，ドイツで大いに評判になったオリジナルをコピーしたものであった。しかしながら，このアマゾネス像に対するホミャコーフの評価は決して高くない。「像全体から受ける感銘は極めて不快だ」[47]。「ドイツで大いに評判になった」とのことなので，客観的に言ってこの像の出来自体は悪かろうはずがない。ホミャコーフは一般公衆とは別の観点からこの像を評価していることになる。ホミャコーフがここで問題にしているのは，像の外面的な出来ではなく，その像を創作に導いた思想であった。ここでホミャコーフは，アマゾネス像の評価から，民族的なものと普遍的なもの，という問題に議論を展開している。

ホミャコーフは，アマゾネスが戦斧でなく槍を持っているだとか，男のようなポーズをしているとか幾多の欠点があるにもかかわらず，この像の最大の欠点を「この像の思想自体」に求める。この欠点が故にそれは「完全に真実も美も欠いている」[48]，と厳しい評価を下す。ホミャコーフによれば，この像のオリジナルがドイツで作られた時，ヨーロッパには古典主義が流行していた。「古代への一面的な愛の時代」である。このような時代を背景に「古代の姿を多かれ少なかれ意図的に模倣した数多くの新しい作品」が生み出され，「模倣の輪が広がった」のであった[49]。アマゾネス像も「古代ギリシア人でもなく，オリンピアの神々を信仰もしていない」ドイツの彫刻家が「ギリシア趣味」で作ったにすぎない[50]。外見上はギリシア彫刻であっても，このアマゾネス像は真のギリシア彫刻ではない，ということになる。ギリシア彫刻は，それが古代ギリシアにおいて，ギリシア人によって作られてこそ芸術的価値があるのだ。この見地からホミャコーフはひるがえってドイツのバイエルンに建つゴチック建築を高く評価する。なぜならそれらはドイツ中世の宗教的精神に満ちており「民族の生活がそのすべてに満ち溢れている」からである[51]。美の本質を民族の生活を通して，それとの「総合」によって表現することが芸術である，との立場である。

同じことが学問科学，およびその応用技術についてもいえる。イギリスのロンドンで開催された1851年の万国博覧会についての評論においても，イギリスの近代技術を高く評価する一方で，ホミャコーフはイギリスの生活を形式的，表面的に模倣する「我が国のイギリス・マニア」を「これほど滑稽なものはない」と批判している[52]。このイギリス・マニアは昼間なのにイギリスでは朝食の時間だといって「朝食」をとり，夜に「昼食」をとる，といった具合に，イギリス現地の時間に合わせてロシアで生活している，というのだ。このように「すべてロシア的なものから疎遠になったロシア人」はイギリス人から見てもすでに「別の人種，別の民族に属する人々」，つまりは「兄弟」とは見做されず，「自分の

サル」としか見做されない，とホミャコーフは論じるのであった[53]。生活との「総合」を欠いた外見のみの猿真似がここでも否定されているのだ。

先に述べたピョートル改革批判でも主張された，「総合」を欠いた学問芸術の導入に対する批判に通底する批判である。ホミャコーフは，ピョートルが「多くの局地的で偶然的なものを全人類的で永久の真実だと理解した」[54]，とし，ピョートルの誤りが学問芸術といった全人類的なものを導入する際に，それとともに，他の民族に関わるものでロシア民族には何の「総合」の契機もない「局地的で偶然的なもの」も力ずくで導入したところにある，とした。その結果，彼は「自分の畑に多くの雑草を植え付けた」のであった[55]。ピョートルの誤った西欧化の結果，「ピョートル以前の風土 стихия によって造られた物質的，地理的に偉大なルーシ」の成長の芽が摘み取られ，ロシアの知的活動は停滞してしまった。この間の事情をホミャコーフは，「ドイツ人なら誰も，我が国のすべての学問をポケット・ブックに押し込むことも容易にできる」，とも言っている[56]。

彼がその最晩年の論文「セルビア人への手紙」において，ピョートルの偉大な功績としてオランダから造船技術を導入したことを挙げる一方で，船や航海に関するすべての言葉もオランダから輸入してしまったことを「恐るべき無思慮」と批判しているのもこれと同じ文脈である[57]。船員になろうとするロシアの若者は，造船術や航海術（これは普遍的な技術である）を学ぶ際に何千という耳慣れない外国語（これは局地的で偶然的なものである）を学ばなければならないからである。かくしてホミャコーフは，このような「一世紀半の虚偽，一世紀半の習慣」に対して「知的な戦い」を挑むのであった。「前へと進んだ一歩は，それがいかに小さくとも，実を結ばぬままではおられない」との確信のもとに[58]。

Ⅳ　技術と民族性

一般に古典的スラヴ派のメンバーは西欧通である。ホミャコーフが外国語に堪能でパリでの生活を経験したことはすでに述べたが，キレーエフスキー兄弟もドイツに留学してヘーゲルやシェリングの講義を直接聴講した経験を持つ。コシェリョーフも外務省勤務時代にヨーロッパ各国を歴訪している。ゲルツェンやベリンスキーといった西欧派のメンバーが概して西欧体験がなかったのとは対照的である[59]。彼らスラヴ派のメンバーがロシアの民族性に目覚めたのも，当時西欧で高揚していたナショナリズムと無縁ではない。西欧各地でナショナリズムの高揚を目の当たりにした彼らは，ドイツやフランスに民族性があるのと同様にロシアにも民族性があるはずだ，と確信したのであった。決してロシアだけが特殊なのではなく，人類はどの民族もそれぞれ民族性を帯びるが故に，他の民族と同様にロシアもまた，民族性を持つのだと考えた。彼らの民族性の主張も，ロシアだけが民

族性を持つとは決して主張していない。ヨーロッパの他の諸民族の中でロシア民族を位置づけているのである。

同時に古典的スラヴ派のメンバーは，大きな領地をもつ地主貴族でもあった。領地の経営者として穀物価格や関税問題については当然のことながら関心を寄せたし，新しい農業機械や鉄道についても農村企業家としての立場から興味を寄せていた。ホミャコーフのロータリー蒸気機関も「農業目的への近年の巨大な需要」に応えたものだった[60]。特に従軍経験のあるホミャコーフは，軍事技術の必要性を痛感していたはずだ。軍事的にも経済的にも競争的な国際環境の中で，ロシアのみがピョートル以前の惰眠をむさぼることができないことは他のスラヴ派のメンバーもよく理解していた。ロシア国内より優れた技術が国外にあれば，これを導入するのも「必要」であると考えたのだ。

しかしピョートルによる西欧文明の導入はロシアに根付かなかった。ロシアの生活，ロシアの民族性との「総合」が欠けていたからだ。ピョートルの誤りは「人類普遍のもの」と「局地的で偶然的なもの」（つまり個別的なもの）の区別ができず，玉石混交で西欧文明を導入してしまったことにある。西欧文明がそれぞれ個別の民族性を帯びていることに注意しなかったのだ。イギリスの水晶宮はイギリスの民族性を帯びるし，ギリシア彫刻は古代ギリシアの民族性を帯びる。同様にオランダの造船技術はオランダの民族性を帯びている。つまり西欧文明とは，それぞれの民族性（個別的なもの）と技術（普遍的なもの）が「総合」されて形成されているのだ。水晶宮はイギリス社会の要請から生まれたものだし，オランダの造船技術も海運国オランダ社会の要請を反映したものだ。ギリシア芸術もギリシアの生活や美意識の中から生まれたものである。ホミャコーフの蒸気機関も農業国ロシアの「巨大な需要」から生まれたものだった。その限りで技術はそれぞれの民族性と「総合」されている。

では，これらを別の地に導入するとどうなるか。ピョートルの誤りはこれら他の民族が生んだ文明，民族性個別性を帯びた技術を，人類普遍の学問科学と誤認して導入したことにあった。他の民族性を帯びているが故にロシアの民族性と「総合」はできないままに。ホミャコーフによるピョートル批判はこの「租界的態度 колонистские отношения」に向けられたものだった[61]。いくらイギリスの水晶宮が素晴らしいと言って，イギリス時間で食事をする必要はないし，オランダの造船技術が必要だからといって，船の部品を外国語で呼ぶ必要はない。ロシア人が必要としていないものを，ただ外国人が使っているというだけの理由で導入する必要はないのだ。逆に，ロシアの民族性が「必要」とする純粋技術は，「局地的で偶然的なもの」たる他民族の民族性を捨象して導入することによって，今度はロシアの生活と「総合」を図ることができる。さらにこのような技術を導入するこ

とによってロシア文明はより豊かになるはずだ。「我々はすでに自らの模倣性の中に安住していてはならないのだ」[62]。

まさにこの外国列強との競争的環境における技術導入の必要性，および導入技術の現地化，といった視点が農奴解放への積極的な関与や地方政治への参加という 60 年代以降の「大改革」の時代におけるスラヴ派の活動に道を開いているのである。

むすび

スラヴ派の説く，ロシアの民族性の主張と技術に対する高い関心という一見矛盾する 2 つの要素ではあるが，外来文明を純粋に技術的なものと他国の民族性とに切り分けて解釈することによって整合的に解釈できたと思う。図式的に単純化すれば，外国で開発された技術は，外国の民族性を切り分け，純粋技術としてロシアの必要と総合されるとき，ロシアの民族性を帯びた当地の技術となる，ということになる。

なお，ロシアの民族性と学問芸術との問題については，これより少し後，1856 年にスラヴ派の雑誌『ロシアの談話』と西欧派を代弁する雑誌『モスクワ報知』との間で一連の論争が展開される[63]。この時にスラヴ派を代表して論陣を張るのは Ю. Ф. サマーリンであるが，このテーマについては稿を改めて論じることにしたい。

また，水晶宮に関しては，それが常設の展示場として 1856 年にシンドナムに移設された際に，西欧派急進派を代表するＨ．Γ．チェルヌィシェフスキーも『祖国雑記』および『現代人』の誌上において詳細に紹介している[64]。また，水晶宮と思われる建物は彼の小説『何をなすべきか』においても登場している[65]。スラヴ派が技術を肯定しているのと対照的に，チェルヌィシェフスキーのこれらの評論においては，水晶宮に代表される西欧の高い技術力，およびそれを実現する巨大な資本に対する脅威が前面に出ており，ここから自由放任主義政策に対する批判を展開しているのが特徴であるが，これもまた稿を改めて論じるべきテーマである。

註

1　ツィンバーエフはモスクワのスラヴ派サークルを「顕著なリベラル反対派の中心」としてスラヴ派をリベラルの一派としている。*Цимбаев Н. И.* Славянофильство. 2-ое издание. М., 2013. С. 241. ウォルトマンも「進歩的勢力」という文脈でスラヴ派を「リベラル」としている。R. Wortman, "Koshelev, Samarin, and Cherkassky, and the Fate of Liberal Slavophilism", *Slavic Review,* 1962, p.261.「ロシア・リベラル」の特質を巡っては, 拙稿「書評:杉浦秀一著『ロシア自由主義の政治思想』」,『ロシア史研究』, 1999 年, 第 65 号, および杉浦秀一「カヴェーリンとロシア的福祉国家」, 科研費報告論文集『ロシア思想史研究』, 2004 年, 第 1 号, 参照。

2　*Дмитриев С. С.* Славянофилы // Советская историческая энциклопедия. М., 1971. Т. 13. С. 34.

3　*Кошелев А. И.* Поездка русского земледельца в Англию и на всемирную выставку // Московский сборник. М., 1852. Т. 1. *Он же*. Соображение касательно устройства железных дорог в России // Русская беседа. 1856. № 1. Отд. III. *Он же*. Соображение о пользе устройства железной дороги от Динабурга в курскую губернию // Русская беседа. 1856. № 1. Отд. III. *Аксаков К. С.?* Москва 16 Августа // Молва. 1857. № 19.

4　*Дудзинская Е. А.* Буржуазные тенденции в теории и практике славянофилов // Вопрос истории. 1972. № 1. С. 53.

5　古典的スラヴ派をグループとして取り扱った研究としては, 拙稿「古典的スラヴ派の言論活動」, 札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』, 第 80 号, 2014 年 3 月, 参照。イズムとして「古典的スラヴ主義」を同定した研究としては, 清水昭雄「『古典的スラヴ主義』とは何か」, 科研費論文集『ロシア思想史研究』, 2007 年, 第 4 号, 参照。

6　スラヴ派の汎スラヴ主義への展開については, 拙稿「クリミア戦争直後のイヴァン・アクサーコフ：スラヴ主義から汎スラヴ主義への展開」, 前掲書, 第 69 号, 2008 年 11 月, および, 同「『スラヴ主義から汎スラヴ主義への展開』再考」, 同上, 第 84 号, 2016 年 3 月, 参照。

7　古典的スラヴ派のメンバーの一人, А. И. コシェリョーフの技術論を「人為」と「自然」という観点から分析したものとして, 同「А. И. コシェリョーフと近代技術」, 科研費報告論文集『競争的国際関係を与件とした広域共生の政治思想に関する研究』, 2014 年 3 月, 参照。

8　*Хомяков А. С.* О старом и новом // Полное собрание сочинений. М., 1900. Т. 3. С. 11.

9　*Кошелев А. И.* Записки / Сост. Цимбаевым Н. И. МГУ. 1991. С. 88-89.

10　*Ловягин А. М.* Хомяков, Алексей Степанович // Русский биографический словарь. СПб., 1901. Т. 21. С. 397.

11　*Хомяков.* Description of the “Moskovka”, a New Rotator Steam Engine // Полное собрание сочинений. Т. 3. С. 483-.

12　*Он же.* Письмо в Петербург по поводу железной дороги // Там же. С. 106.

13　後年このアイデアはパリで実用化された。都市圧縮空気社 SUDAC については, ギュンター・リアー, オリヴィエ・ファイ著古川まり訳『パリ地下都市の歴史』, 東洋書林, 2009 年, 167-173 頁参照。

14　*Хомяков.* Железная дорога. С. 108.

15　*Он же.* Письмо в Петербург о выставке // Там же. С. 86.

16　*Яновский А. Е.* Выставка // Энциклопедический словарь Брокгауза и Ефрона. СПб., 1892. Т. 7. С. 557-560.

17　*Хомяков.* О выставке. С. 87-89.

18　Там же. С. 90-92.

19　松村昌家『大英帝国博覧会の歴史』, ミネルヴァ書房, 2014 年, 2 頁。

20　*Хомяков.* Аристотель и Всемирная выставка // Полное собрание сочинений. Т. 1. С. 186.

21　松村前掲書，25-36 頁。

22　同上，38 頁。

23　*Хомяков.* Аристотель. С. 185.

24　水晶宮の建築に伴って，敷地となったハイド・パークの 3 本の楡の木を伐採することになったのだが，これに対する猛烈な反対運動がおこり，設計者のパクストンは建物の袖廊の上に約 33m の丸屋根を設けることでこれらの大木を伐採せずに水晶宮の内部に取り込むことにした。松村前掲書，33-36 頁。ホミャコーフは大木を保存したイギリスを「古いものに忠実でそこにその知性の力がある」と称賛し，「自らの過去との結びつきを断ち切った」他の西欧諸国と対比している。イギリスは「一年草を植えるために何百年もの木を切ることはしない」のだ。*Хомяков.* Аристотель. С. 187.

25　Там же. С. 185-186.

26　Там же. С. 186.

27　Menai Suspension Bridge: アングルシー島とグレートブリテン本土を結ぶ吊り橋。1826 年に完成した。

28　Там же. С. 184-185.

29　清水氏は，ホミャコーフの思想の特徴として「ロシアと西欧の対立においてロシアの優越を論証しようとする絶えることのない内的な要求」を指摘している。清水昭雄「スラヴ主義者，Ａ．Ｃ．ホミャコーフの思考法の特徴について」，『一橋研究』，1983 年，第 8 巻第 3 号，54 頁。

30　同「ピョートル大帝とその改革に関する古典的スラヴ主義者の見解について」，『一橋論叢』，1987 年，第 97 巻第 5 号，984 頁。

31　*Хомяков.* Аристотель. С. 180-181.

32　*Он же.* О выставке. С. 96.

33　一般にゼムリャー земля とは土地を表わす単語であるが，スラヴ派はこの単語を国家権力に対して「社会」，「民間」の意味でしばしば使用している。彼らにとってゼムリャーは国家に先立つ存在であり，「ゼムリャーが国家を作ったのであって，国家がゼムリャーを作ったのではない」のであった。См. *Самарин Ю. Ф.* О мнениях «Современника», исторических и литературных // Избранные произведения. М., 1996. С. 431.

34　*Хомяков.* Железная дорога. С. 115.

35　Там же. なお「古代の盗人工場」が何を指すかは不明。

36　Там же. С. 109.

37　Там же. С. 105. ロシアで最初に旅客列車が開業したのはペテルブルクとツァルスコエ・セロー間の 27km を結ぶ「おもちゃ」のような鉄道だった。他方，最初の本格的な鉄道路線は 1851 年にモスクワとペテルブルク間 645km を結んで開通したニコライ鉄道だった。ホミャコーフのこの論文が書かれた時期は，ちょうどこのニコライ鉄道建設の計画が持ち上がった時期と一致する。

38　Там же. С. 104-105.

39　*Он же.* О выставке. С. 87.

40　清水昭雄「ピョートル大帝と」，686 頁。

41　*Хомяков.* Железная дорога. С. 111.

42　*Он же.* Всемирная выставка. С. 181.

43　Там же.

44　Там же.

45　*Он же.* Аристотель. С. 192-193.

46　*Он же.* О выставке. С. 90.

47　Там же. С. 91.

48　Там же.

49　Там же. С. 92.

50 Там же.

51 Там же. С. 94.

52 *Он же.* Аристотель. С. 192.

53 Там же.

54 *Он же.* О выставке. С. 97.

55 Там же.

56 *Он же.* Аристотель. С. 182.

57 *Он же.* К Сербам. Послание из Москвы // Полное собрание сочинений. Т. 1. С. 392.

58 *Он же.* Аристотель. С. 194.

59 ゲルツェンは 1847 年に出国するまでロシアを出たことがなかった。ベリンスキーはヘルシンキ港に浮かぶお台場，スオメンリンナで生まれたが当時のフィンランド大公国はロシア帝国と同君連合の関係にあり，西欧というよりはロシア帝国の一部とみなされた。しかも彼は 5 歳の時に父の転勤に伴ってペルミに移っている。

60 *Хомяков.* Moskovka. С. 3.

61 *Он же.* Аристотель. С. 190.

62 Там же. С. 194.

63 *Самарин Ю. Ф.* Два слова о народности в науке // Русская беседа. 1856. № 1. Отд. II. С. 35-47. *Чичерин Б. Н.* О народности в науке // Русский вестник. 1856. №9. Отд. «Современная летопись». С. 62-72. *Он же.* Заметки Русского вестника – Русская беседа и так называемое славянофильское направление // Русский вестник. 1856. № 9. Отд. «Современная летопись». С. 219-223. *Самарин.* О народном образовании // Русская беседа. 1856. № 2. Отд. V. С. 85-106. "*Редакция*". Заметки Русского вестника – вопрос о народности в науке // Русский вестник. 1856. № 12. Отд. «Современная летопись». С. 312-319. *Самарин.* Замечания на «Заметки «Русского вестника» по вопросу о народности в науке» // Сочинения Ю. Ф. Самарин. М., 1877. Т. 1. С. 148-161. *Он же.* По поводу мнения «Русского вестника» о занятиях философией, о народных началах и об отношении их к цивилизации // Там же. С. 266-292.

64 *Чернышевский. Н. Г.* Открытие Сейденгемского дворца, его история и описание // Современник. СПб., 1854. № 7. Отд. «Современные заметки». С. 36-44. *Он же.* Новости литературы, искусств, наук и промышленности // Отечественные записки. СПб., 1854. № 8. Отд. «Смесь». С. 81-101.

65 *Он же.* Что делать? // Полное собрание сочинений. М., 1939. Т. 11. С. 277.

（平成 28 年度札幌大学研究助成制度による研究成果である）